

XenosagaI・II - 第七話 嫌疑 - Verdacht - 下

デュランダル 

シオン： ミルチアカー—こんな形で来ることになるとはね。

アレン： 主任、どうかしたんですか？

シオン： え、あ、ううん、なんでもないの。

アレン： （また、なんでもない—ですか）

エルザ 

シオン： さ、これでどう、KOS-MOS。

KOS-MOS： はい、問題ありません。

シオン： よし、メンテナンス終了っと。デュランダルのブリッジに行ってみようか、アレンくん。

アレン： あ、そうですね。行きましょうか？

KOS-MOS はどうします？

シオン： 自己診断プログラム、走らせときたいし。エルザに残ってもらいましょう。

かまわないよね、KOS-MOS。

KOS-MOS： はい、自己診断モードに入ります。

シオン： おやすみ、KOS-MOS。

—じゃ、行こうか、アレンくん。

デュランダル 

アレン： あ、Jr. くー

シオン： ちょっと待って、アレンくん。

Jr.： なあ、モモ。

モモ： はい、なんでしょう。

Jr.： もうすぐ第二ミルチアだ。そしたら、お別れだな。

モモ： はいー

Jr.： レアリエンが縁起をかつぐかどうかは知らねーけどさーこれ、持ってろ。お守りだ。

モモ： 綺麗ーこれ、なんですか？

Jr.： 大昔の鉄砲のタマ。見な、元気になる呪文が彫ってあるだろ。

”Go ahead, make my day” ってな。

モモ： ありがとうー大事にします！

Jr.： あ、そうだ。ちょっと待ってなー

これでよしーと。

モモ： 凄い！ タマとチェーンをつなげたんですか？

Jr.： これなら、身につけておけるだろ。

モモ： Jr. さんて、こんな素敵なこともできるんですね。

Jr.： それなりに疲れるけどなー

さ、ブリッジに行こうか。

モモ： はい！

シオン： Jr. くんってすごいねー

アレン： ほんとですよ。さらっとプレゼント渡したりして、僕も見習わなきゃー

シオン： なんのこと？ 掌の上で、金属を融合させたチカラ、見てなかったの？

アレン： え？

あ、いや、そうですね！ Jr. くんってすごいですよね！

（はあー）

シオン： ーさ、はやくブリッジに行きましょう。

ブリッジ

シェリイ：まもなくミルチア太陽系圏に入ります。周回軌道への進入は 1400 現地標準時を予定。
第二ミルチア宙港管制官、フライトプランを受信し、入港許可をお願いします。

シオン：（軌道へ入るところね。しばらくここで待ってましょう）
アレン：（そうですねー）

メリイ：ー妙な出迎えやな。今回はエスコート付きやのん？
シェリイ：進路を塞いでいる。これは出迎えではないわー！
百式：連邦艦隊より、光子魚雷の発射を確認！ 着弾まで十秒！
光子魚雷、本艦近傍で自爆しました！ 本艦の周りを、連邦艦籍の艦隊が包囲しつつあります！
シェリイ：ちび様、これは威嚇ですが、確実に拿捕を狙っているようです。
Jr.：面白え、いったいどういう法的根拠を持ち出してくるつもりだ。

ー

議員：これまでご覧いただいた映像資料からもクーカイ・ファウンデーションが海兵師団に対して行った
先の戦闘行為は明白であり、その後の状況から見ても、その監督自治政府である
第二ミルチアの連邦に対する叛逆行為であると断定せざるをえません。
以上の諸事象を重く見て、第二ミルチア自治政府からの
104 箇条に及ぶ既得権利剥奪緊急動議をここに発議するものであります。
議員：補足となりますが、ゲダルヤ方面軍第 422 艦隊が現在、当該宙域にてクーカイ・ファウンデーション並びに
第二ミルチアの包囲、拘束にあたっております。
リュースリック：お待ちください。それは越権行為ではありませんかな。
議員：緊急時連邦憲章に則った上での艦隊の展開です。問題はありません。
リュースリック：そもそも、クーカイ・ファウンデーションが連邦艦隊を襲ったという嫌疑こそ、
疑ってしかるべきでしょう。彼らがそのような暴挙に出る、いかなる動機があるというのでしょうか。

ー

アレン：ど、どうなってるんです、このニュース！
ケイオス：デュランダルがミルチア政府と共謀して連邦艦隊を攻撃したと思われるみたいだね。

シオン：連邦艦隊って、どこのー

メリィ：ちょっと、サブモニターでネットワークニュース見てみ！ ブッ飛ぶで！

『ー連邦絶対基準時 21 日未明、テセドア方面第一一七海兵師団がクーカイ・ファウンデーション所有の重武装艦による攻撃を受けました。旗艦ヴォークリンデをはじめとする同師団は壊滅ー』

シオン：ヴォークリンデ！？ ーどういうこと、グノーシスの襲撃は報告されてるはずじゃー

『財団はかねてから、第二ミルチア自治政府との癒着を指摘されており、連邦評議会は連邦反逆罪の適用もあり得るとして、現地へ艦隊を派遣した模様ですー』

ケイオス：よくできた合成映像だね。それにしても、交戦宙域の絶対座標まで同じってのはー

Jr.：くそっ、U-TIC 機関の戦闘艦と一戦やらかした時の映像だ。奴ら、録画していやがったのか。

ガイナン：なるほど、それで絶対座標も合致しているわけか。動かぬ証拠という奴だな。

本当に私たちがやったような気がしてくるよ。

ジギー：この状況にあって、随分な余裕だな。

アレン：あ、でも、ファウンデーションの擁護をしてくれてる議員もいるじゃないですかー

ガイナン：リユーリック討議員かー相変わらず、我々には親切だな。

Jr.：ザルヴァートル派の親切なんか、当てになるかよ。

俺たちを抱き込んで、なにを目論んでるんだか。

ガイナン：（ー純粋な親切かもしれんぞ、なにしろ、我々の遺伝子学上の父・故ディミトリ・ユーリエフはー
彼らデザイナーズチャイルドの起源ーファースト・ザルヴァートルだからな）

Jr.：（！ 奴らーそれを知ってるってのか！？）

ガイナン：（わからんー可能性のひとつを挙げてみただけだ）

Jr.：（ー）

シオン：ーでも、こんな容疑、デッチ上げもいいところだわ。生存者の私たちが証明すればー

ガイナン：生き残ったのは共謀者だからだ。ーそう思われるぞ。

アレン：そんな！ ーあ、本社から何の連絡もしてこないのは、まさかー

ケイオス：みんな、評議会の方を見て。意外な展開だよ。

議員：（なぜ、あの方が評議会に――）

議員：（もう一世紀以上も、彼らは政治には不干渉を貫いてきたはずでは――）

???：クーカイ・ファウンデーションとやらが不逞な行為をおかした理由は、私から説明させていただきますしょう。

議員：（移民船団の長――教皇セルギウス17世――）

教皇セルギウス：第一一七海兵師団を襲撃した目的、それは艦隊が回収した、漂流物の強奪に他なりません。

議員：教皇貌下、その漂流物とは――

教皇セルギウス：――むろん、ゾハルです。

議員：（やはり――）

議員：（だから、移民船団が――）

教皇セルギウス：太古より、ゾハルの管理は我ら移民船団に課せられた、聖なる使命でありました。

ですが、十四年前――あのヨアキム・ミズラヒが研究のためと称し、

我らの手からゾハルを持ち去りました。

そして、オリジナルゾハルは旧ミルチアに封印され、誰の手も及ぶことはなくなった。

――皆さまの周知の通りであります。ですが、人類にはその代償物が残された。

ミズラヒが建造した、十二器のエミュレーターです。

オリジナルが失われた以上、エミュレーターもまた、我らに管理されるのが本道。

しかるに、クーカイ・ファウンデーションは、不当にその占有を続けています。

リューリック：お言葉ですが、貌下――

旧ミルチアの遺産を、利害の絡まない管理団体に託すことは、十四年前の決議で決まったことです。

教皇セルギウス：その決議が誤りであったことが、今回の叛乱行為によって、証明されたようすな。

議員：貌下のおっしゃる通り！ 一私企業がゾハルを独占することの危険性を再確認すべきです。

リューリック：クーカイ・ファウンデーションが財団化したのは、戦後処理が終了し、武装解除をしてからです。

現在の名称となり、一部門を企業化してからは、

その主たる業務は娯楽観光産業となっています。

ゾハルの絡みようもないではありませんか。

議員：あの巨大戦艦――あれでも武装解除したというのか！

リューリック：最低限のものでしょう。設立の経緯を思い出していただきたい。

そして、近年のグノーシス対策における彼らの功績を無視することはできないと考えます。

教皇セルギウス：惑星アリアドネが消失した事件、みなさま、お忘れではありませんな。

議員：そ、それがなにか――

教皇セルギウス：あの事件――我々移民船団は、ゾハルによって引き起こされたものと考えております。

議員：な、なんと――！

教皇セルギウス：あの事件を引き起こしたクーカイ・ファウンデーションが、事実関係を隠蔽するため、
星団連邦軍に回収されたゾハルエミュレーターを奪取した――そう考えると、
すべての平仄[ひょうそく]があうのではありませんか。

リューリック：そ、それは――

議員：財団には他にも、百式プロトタイプを拉致した嫌疑もかけられています。

接触小委員会の意見も聞きたいですな、ユリ・ミズラヒ博士――

ユリ・ミズラヒ：プロトタイプについては、当初の計画に基づいて、第二ミルチアへと移送する途中であったに過ぎません。

我々、接触小委員会が移送を依頼した運送業者はフリーではありますが、その船籍はコロニーとしても
クーカイ・ファウンデーションに帰属しており、財団とは以前から業務連携が行われていました。
今回のプロトタイプの保護も、正式に報告を受けているもので拉致には当たりません。

ですので、本件において財団は善意の協力者であると、小委員会は理解しています。

議員：どうかな――グノーシスを召喚し、我々連邦を壊滅せんとした、
あの狂人を生み出したのも、ミルチアであり、現在の自治政府も財団も、
その意を継いでいるのではありませんか。

亡夫を庇いたくなる気持ちもわからないではないが――もしやあなたもこの件に――

ユリ・ミズラヒ：私がここにいる理由を、そのように曲解されるのは心外ですね。

議員：――どうだかな。

リューリック：議員、博士には関係ないでしょう。

議員：それはそうだ、議題を元に戻してくれ。

――

モモ：ママ――

ガイナン：どうやら、我々に好意的なのはリューリック討議員とユリ・ミズラヒ博士だけのようだな。

Jr.：それにしても、なんだって移民船団の教皇が出張ってくるんだよ。

それも、U-TIC 機関の悪さを、全部、俺たちになすりつけやがって。

ガイナン：人類発祥の地を旅立った栄光ある開拓者たち――

彼らがその誇りを失い、単に長い来歴を有するだけの宗教結社と堕して久しい。

我々を陥れる陰謀が、彼らの利害と一致したということだろうな。

百式：――包囲展開中の連邦艦隊から通告です！

Jr.：音声出力してくれ！

『――連邦法に基づき、クーカイ・ファウンデーションを第18編37章798条・防衛情報の収集隠匿及び第18編105章2153条・連邦所属艦隊への戦闘行為容疑で拘束する。速やかに停艦し、武装解除せよ。また、ミルチア政府がクーカイ・ファウンデーションの入港を幫助した場合には、連邦法第18編115章2384条・叛乱扇動のコンスピラシーに該当するとして、非常事態宣言を発令する。』

百式：揚陸艇が接近してきます。エアロックの開放が要求されました！

ガイナン：ここは従うしかなかろう。

Jr.：――ああ。

ラピス：私は星団連邦軍特殊作戦司令部情報局ラピス・ローマン大尉。
現時点をもって、本艦を星団連邦の管理下に置くものとします。
ヴォークリンデの生存者ですね。参考人として身柄をお預かりします。
なお、ヴェクターの資材は証拠として一時的に接收します。

シオン：KOS-MOS――

兵士：大尉！

保護願いの出ている百式観測器を発見しました。

Jr.：おい、乱暴すんな！

ラピス：一部屋を収容に使い、監視を固めるように。

兵士：全員ですか？

ラピス：分散させると、監視が手薄になります。後続との合流までに、可能な限り、艦内の搜索を進めなさい。

兵士：了解しました。

行け！

Jr.：チッ！

ラピス：ガイナン・クーカイ、星団連邦反逆罪容疑で連行します。――来なさい。

ガイナン：おおせのまに――

—

ジギー：手際が良すぎるなー

シオン：どういことですか？

ジギー：艦隊の展開が早すぎる。

どのような状況下にあっても、必ずモモが手中に戻ってくるよう準備していたかー

むしろ、第二ミルチアを陥れることすら、最初からプランに入っていたのかもしれん。

Jr.：ミルチア紛争後、第二ミルチアには中立地域として、様々な既得権、超法規的特権が与えられていたからな。

U-TIC 機関に限らず、それを疎ましく思っている連中は多いぜ。

ジギー：モモが軟禁されていた U-TIC 機関の拠点ー

その情報がどこからもたらされたのか、気になってはいたがー

出発した時から仕組まれていたーどうもそんな匂いがする。

モモ：それはーママが、モモの救助を依頼した時からってことですか。

ケイオス：まさか、接触小委員会の内部にも U-TIC 機関の人間がー

アレン：考えられない話じゃないですね。場合によっては、依頼者であるユリ・ミズラヒ博士自身もー

モモ：ママはーママはそんなこと、絶対にしません。

シオン：アレンくん！

アレン：す、すみませんー

—

ラピス：このケースを開けなさい。あなたの網膜で開くようになっています。

ガイナン：————

——通信機？

ヘルマー『待たせたな、ガイナン。』

ガイナン：ヘルマー代表か。

ヘルマー『私も、今はそれなりに動き辛い立場なのだが、連邦議会には手を回している。

いま、君の隣にいる女性はラピス・ローマン大尉。

軍内部に潜伏する U-TIC 機関の動きを探るために、数年前から潜入させている私の信頼に足る部下だ。』

ガイナン：——常に抜かりないな。

ヘルマー『歳をとると、用心深くなるものでね。ローマン大尉には、デュランダル of 諸記録をあたってもらっている。

連中に改竄される前に目処をつけねばならん。協力してやってくれ。』

ガイナン：了解した。デュランダルのマスターキーを渡しておこう。

- 

@：代表、ヴェクターの CEO から EPR 通信が入っていますが――

ヘルマー：ヴェクターの？　――わかった、出よう。

すまない、状況が進展したらまた連絡する。

ガイナン『相変わらず多忙だな。』

ヘルマー：君ほどではないさ。

ヴィルヘルム『お久しぶりです、ヘルマー代表。』

ヘルマー：Mr. ヴィルヘルムこちらこそ。枢機院議長を退任されて以来ですな。

ヴィルヘルム『状況は伺っています。議会には、私からも口添えしておきましょう。』

ヘルマー：恐縮です、Mr. ヴィルヘルム。

ヴィルヘルム『実は現在、我が曙光はミルチア圏に向けて、航行しています。――厭な予感がするのでね。』

ヘルマー：厭な予感――

ヴィルヘルム『今回の一件、既にお気づきではないのですか。』

ヘルマー：背後に U-TIC 機関がいることは間違いないでしょうな。

ヴィルヘルム『そう。とすれば、彼らの目的は一つ。ミルチアに眠るオリジナルゾハル、そして――』

ヘルマー：ウ・ドゥ――

あれをふたたび、目醒めさせるわけにはいきません。

ヴィルヘルム『弊社の KOS-MOS とそのスタッフがそちらのお世話になっていると思いますが――』

ヘルマー：お言葉ですが、Mr. ヴィルヘルム。クーカイ・ファウンデーションと第二ミルチア政府とは――

ヴィルヘルム『そうでしたね。では、Mr. クーカイにお伝えください。それぐらいならば問題はないでしょう。』

ヘルマー：ええ、その程度ならば。

ヴィルヘルム『しばらくの間、KOS-MOS をお貸ししますので、いかようにも使って欲しい――と。

プロジェクトゾハル実動まではまだ間がありますし、なにより万が一の事態が起きたとき、

アレは役に立ちます。サポートはミルチア支社の二局と戦技研にさせましょう。』

ヘルマー：よろしいので――最高機密なのは？

ヴィルヘルム『打算ですよ、こちらとしても実動データは多い方がいい。』

ヘルマー：了解しました。Mr. クーカイにそ伝えておきましょう。
ヴィルヘルム『恐縮です、では――』

ヘルマー：ウ・ドゥー――か。

―― 

ラピス：予備尋問を行います。

Jr.：――

（いざとなったら、この姉ちゃんを人質にとるか――？）

ケイオス：（いや、もう少し様子を見よう）

ラピス：私は、第二ミルチア自治政府代表討議員ヘルマーの使いです。
――彼も関係者よ。

Jr.：なんだよお、もっとはやく言ってくれよなあ。

ラピス：ごめんなさいね。でも、詳しい話は後、状況だけを説明するわね。
現在、あなた方の身柄は連邦政府及び、軍部の管理下に置かれています。
このままだと、あと数時間としないうちに、モモさんの身柄は政府内部に潜伏する反ミルチア勢力
――つまり U-TIC 機関の下へと移譲され、第二ミルチア自治政府は
そのすべての権限を放棄させられることになるでしょう。
ヘルマー代表が連邦議会内の親ミルチア議員たちへ手を回して、時間を稼いでくれています、
向こうの偽装工作が巧妙な以上、あなた方に、完全に身の証を立ててもらわなければなりません。

シオン：でも、どうやって――

ラピス：そうね――なにか公的な証拠となるようなものがあると良いのだけど。

シオン：公的な証拠――ヴォークリンデの航路記録[ブラックボックス]は？

ラピス：既に回収して調べたわ。でも、最終的なゲートアウトから時間が経過していたせいもあって、
時間軸も含め、証拠映像と完全に一致させられているの。

ケイオス：デュランダルのデータベースはどう？

U-TIC 機関との交戦記録があるはずだから、それで身の証は立てられないかな。

ラピス：それは汎用データベース？

Jr.：ああ。

ケイオス：なにか問題でも？

ラピス：ええー汎用データベースならば、いくらでも改竄の余地があるわ。

証拠能力がはたして、どこまであるかー所有者であっても改竄できない

AAAクラスの公的プロテクトがかかっているようなシステムならあるいはー

Jr.：ト、トリプルエイ！？

そんなプロテクトがかかっているシステムなんて、そうそうあるもんかよ。

連邦政府のマザーフレームか、U.M.N.のオペレーションシステムぐらいのもんだろう。

シオン：ーある。

Jr.：え？

シオン：あるわ！

アレン：あーKOS-MOSか！

Jr.：KOS-MOSだって！？

シオン：ええ、KOS-MOSのデータベースのプロテクトはAAA！

ヴォークリンデでのグノーシスとの戦闘を記録しているわ。それを証拠として提出すればー

アレン：あ、でも、記録の複製[デュプリ]をとるには、本社と連邦政府の二つのキーが要りますよ。

シオン：エンセフェロンダイブで記録を追体験すれば、コネクションギアを通して複製[デュプリ]をとれるわ。

アレン：そんな、ダイブの設備もなしに無理ですよ。

シオン：調整槽の簡易ダイブモジュールでいけるわ。

アレン：冗談でしょ！それにー第一、規約違反ですよ。

シオン：だからって、他に方法ないでしょ。もう、規約はたくさんなのー

アレン：ですがー

シオン：それより問題は どうやって KOS-MOS のもとへ行くかよ。

Jr.：エルザの格納庫へ行くまで、兵士たちとやりあわなくちゃなんねーだろうしな。

モモ：装備もとりあげられてしまいました。

ラピス：装備の方は問題ないわ。転送コードを解除しておきました。

この部屋を出たら、呼び出せるようになっているはずですよ。

Jr.：ひょお、さっすが！

ラピス：あとはー

ロックされている扉はそれで開きます。私たちが無用心だったことにしましょう。
申しわけが立つ程度に、殴ってくださる？

ジギー：――俺でいいのか？

ラピス：あなたでないと説得力ないでしょ。

ジギー：――たしかに。

ラピス：手加減よろしくね。

ジギー：ふん！

――すまん。

ケイオス：よし、行こう。

Jr.：クールだねーちゃん、サンキュ。

シオン：ロック、解除するわよ。

――

Jr.：よし、エルザはすぐそこだ！

どけっ！

シオン：Jr. くん！

Jr.：わかってる、こいつらも眠らせるだけだ！ 命までとりやしねえよ！

???：へえ、ずいぶんお優しいんだな。

Jr.：ぐうっ。

モモ：Jr. さん！

Jr.：大丈夫だ――く、こいつら、ただの兵士じゃねえな――

???：本当だったら、僕が手を汚すつもりはなかったんだけどねええ。

???：リヒャルトさま、ここは私ひとりで――

リヒャルト：余計な真似をするな、ヘルマン！ 僕の遊びを邪魔するなよ！

Jr.：ちっ、遊びだと――小僧がこんなところに出しゃばってくるんじゃないか！

リヒャルト：小僧？ 君に言われたくはないね。

ヘルマン（この船――見覚えがある。たしかローエン格林級の高速クルーザー――
まさか、マシューズ船長の船か――？）

リヒャルト：ヘルマン、なにを惚けている！

ヘルマン：は、申しわけありません。

リヒャルト：さあ、行くよ！

【 戦闘 VS リヒャルト・ヘルマン 】

リヒャルト：ふふふふ——こんなことで僕が壊せると思ったら、大間違いだよ。

あはははは！ 壊れてしまえ！

僕も思い通りにならないお前たちなど、壊れちゃえ！

Jr.：こ、こいつ——いきなり変わりやがった！

ヘルマン：リ、リヒャルトさま——！

【 戦闘 VS リヒャルト・ヘルマン 】

ジギー：——倒したのか？

Jr.：いや、逃げられた。手応えがねえ。

——くそっ、イヤな予感がするぜ。あいつらを取り逃がしたのが、後々、ひびいてきそうだ。

モモ：U-TIC 機関——なんでしょう？

Jr.：ああ、そんな匂いがしたな。

シオン：彼らの正体も気になるけど、いまは先を急ぎましょう。

はやく、KOS-MOS のところへ！

Jr.：ああ、そうだったな。

（待っててくれよ——ガイナン）